

『『バースのかみさんの話』の前口上』(上)

海	老	久	人
浜	口	恵	子
吉	田	和	男

は し が き

私たちは、なべて、「建前」というお仕着をうっちゃって、「本音」で自分の思いのたけをぶちまけて生きてみたいという、時として恐迫観念にも似た思いに駆られることがある。バースのかみさんアリスはそうした思いを一身に担い、見事に果たしおおせた人物であった。しかも、決して放縦に流されることなく、醒めた「わたしなりのやり方」(I. 219)を心得ながら、彼女が前口上の中で語る告白は、逆手にとった権威主義と経験至上主義、銜学癖と俗物性、快楽と苦汁とをないまぜて、一人の女性の豊かな生き様を示した個人史である。それはこよなく私たちの共感を呼び起こさずにはおかない。

本訳はこうした時空の枠を越えて生きる一人の女性の肖像を、日本語で少しでも、その輪郭を明かしてみようというささやかな試みである。

本訳稿はあらかし次のような手続をとった。

1) 底本としては F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (2nd ed.; London: Oxford U. P. 1957) を用いた。

2) 字義解釈にあたっては、*OED*, *MED* をはじめ、数々の註釈書、解説書、現代英語訳を参照した。ひとつひとつその表題を記すことができなかったことをお断りしなければならない。

3) 『『バースのかみさんの話』の前口上』は、金子健二(大正7年)、

吉田新吾(昭和24年)、西脇順三郎(昭和36年)といった先学の訳業がある。字義解釈において相違するところもあったが、ずいぶん啓発をうけた。

4) 註釈は紙幅の都合で割愛せざるを得なかったことをお断りする。

「前口上」全体の訳稿は既に完成しているが、こうした制約の下で、今回は前半部だけ訳出することにした。併せて、お断りする。

(海老久人)

* * *

「結婚の苦しみについてはこの世にその道の権威などなくても、わたしは経験だけで十分お話できます。皆さん、永遠にまします神様のおかげで、十二の歳からこのかた教会の扉の前で五人の夫と契りを結んだのです。こんなに度重なる結婚を結婚として認めていただければの話ですけれど、わたしの夫は皆ちゃんとしたひとかどの男たちでございました。たしかついこの間聞いたのですが、キリスト様が婚礼の席に出かけられたのは後にも先にも一度きり、ガリラヤのカナでのことなのだそうです。つまり、この譬えは、結婚は一度しかしてはいけないというお教えらしいのです。それにまあ、なんてきついお言葉でしょう。神人イエズス様は泉のそばでサマリアの女をお叱りになってこうおっしゃったのです。『あなたには五人の夫がいたが、いまのは夫ではない』と、たしかに、こう言っておられるのです。どういう意味でそう言われたのかわかりませんが、わたしがお聞きしたいのは、どうして五番目の男がサマリアの女の夫ではないのかということなのです。何人までなら夫を持てたのでしょうか。それに、わたしはこの歳になるまで夫の数は何人までという制約について宣べられるのを聞いたことは一度もありません。殿方があれこれ臆測したり解釈なさるのもかまいませんけど、ほんとうのところ、わたしにはっきりわかっているのは、神様が『生めよ、ふえよ』とおっしゃっておられることです。わた

しはこの尊い聖句を十分理解しているつもりなのです。それに、夫となる人は父母を離れてわたしを妻にすべきだとおっしゃっていることもよく承知しております。でも、結婚の回数については、二度の結婚についても八度の結婚についてもべつになにも触れておられないのです。それなのにどうして殿方はそのことをとやかく悪しざまに言わなくてはならないのでしょうか。

(34)

それにほら、あの賢王サロモン様の場合を考えてもごらん下さいまし。あの方は奥方をお一人ならず、幾人もはべらせておられたはずです。ああ、あの方の半分でもいいから瑞瑞しく生きかえるような気分を味わうことがわたしにも許されたらねえ。あんなにたくさんの奥方をおもちだなんて、あの方はなんて素敵な賜物を神様からお受けとりになったのでしょうか。この世に生を受けた者の中で、これほどいい思いをした人なんていやしません。わたしの考えでは、この高貴な王様はさぞかし初夜に奥方ひとりひとりと楽しい果たし合いをなさったことと思うのですよ。それほど果報者だったのです。ありがたいことに、このわたし、五度も結婚したのですからねえ。(44 a) その中から、わたしが掴み取ったのは、金囊ぶくろも金櫃もいちばん立派なのを持っている殿方。いろいろ学風の違う学校に学べば、それだけ優れた学者先生が出来上り、それにいろいろ多彩な仕事はたしかに職人の腕前を磨く道理。五人も夫を持てば、わたしだってちょっとした指南役。(44 f) なんてしたら六人目の夫もいつでもどうぞ。だって、実のところ、わたしには操を守りとおして一人でいようなどという気は全然ありませんもの。夫がこの世からいなくなれば、すぐ別のキリスト教徒の殿方にもらっていただきます。使徒様もおっしゃっているではありませんか。神様の御名にかけて、わたしには好きなところへ嫁ぐ自由があり、そして結婚することは罪を犯すことにはならないし、結婚する方が情欲に燃えるよりはましだともおっしゃっておられます。世間ではあの邪悪なラメクや彼の重婚のことで悪態をついていますけど、それがどうだっていうのです。

かまうものですか。アブラハム様が信仰篤い人であったことはよく存じています。またわたしの知る限り、ヤコブ様もそうでした。この方たち二人共、妻を二人以上も娶っておられましたし、他の多くの信仰篤い方々もそうでした。いつの時代にもせよ、天にまします神様が結婚をはっきりとしたお言葉で禁じられたなどと申せますか。どうかお願いします。おっしゃって下さいな。また、どこで純潔をお命じになったのでしょうか。みなさん同様わたしもよく承知しておりますけど、使徒様が処女性についてお話をされた時、間違いなく、この問題については主の命令はなにも受けていないとおっしゃっておられるのです。殿方は女に^{ひとり}独身でいるように勧めることはできますけど、忠告は命令ではありません。使徒様は処女性についてはわたしたち自身の判断にまかせられたのです。もし神様が処女であるようにお命じになったとすれば、その際、^{おや}閨室ごとにかかずらう結婚そのものを非難されたでしょうからね。それにいいですか、もしも種が蒔かれなければ処女さえいったいどこから生れてくるのでしょうか。いかにパウロ様でも、少くとも主がお命じになっていないものをあえてご自分でお命じにはならないはずです。処女で通すものに賞が出ているのです。さあ、誰でもとれる者はおとりなさい。誰が一番速く走るか見てみようではありませんか。

(76)

でも、このお言葉は誰にでもあてはまるわけではありません。神様が御自分の権能によってこのお言葉を伝授したいと思いいになった者だけにいえることなのです。使徒様が童貞であったことはよく承知していますとも。使徒様は皆ご自身のようにあってほしいと書いてもおられ、話されてもおられますけど、でも、それもこれもみな純潔の勧めにすぎないのです。それに使徒様は一步譲って、わたしが妻になることをお許し下さっているのですから。もしつれあいが死んでしまえば、わたしが再婚したところで不品行というわけでなし、重婚だということで咎立をされる筋合なんかこれっぽっちもないのです。女には触れないのが一番とは使徒様のお言葉です

けど、これは寝床や寝椅子の中でのこと。火と火口を一緒にしておいては危なくてしかたありませんものね。この譬えがどういうことを意味しているのかおわかりでしょう。要するに、使徒様はいいかげんでもろい結婚よりは処女でいる方がずっと完全であるとお考えなのです。いいかげんでもろいと言いましたけど、それは夫と妻が貞節を守って夫婦生活を送らなければ、ということなのです。(94)

処女でいる方が再婚するよりもいいといわれても、わたしは少しもうらやましいなどとは思いません。かといって、身も心も清らかでいることは誰しも願うことですから、わたしは自分のことをどうこう自慢しようなどというつもりはもうとうありません。皆様ご存知のように、一家の主人といえども持っている器全部が全部金製というわけではありません。なかには木製の器もあり、それでもけっこう役に立っているのです。神様は人それぞれに応じてみ前にお召しになられるのです。お思召のままに、ある者はあれを、またある者はこれをという具合に、人それぞれにふさわしい賜物を受けているのです。(104)

純潔のままにいるということは完全無欠で立派なことです。敬虔な気持ちから行われれば、それは禁欲でもあります。でも、完全無欠の本家本元たるキリスト様はみんなが皆持物一切を売り払い、貧しい人々に施しをして、こういう風にして彼にならってご自分のおみ足に従うように命じておられるわけではないのです。彼は完全無欠な生涯を送りたいと願う者たちにそうおっしゃったのです。それに皆さん、はばかりながらこのわたしはそんな人間ではございません。わたしは人生の華を結婚による営みやその実りの歓喜に捧げたいと思っています。それに生殖の器はいったいなんのために造られ、かくまでも過つことなき創造主がそれを造り給うたのでしょうか。教えてもらいたいものです。伊達に付いてはいいことぐらいお分かりいただけるでしょう。いろいろ積義とやらをなさりたい方はなさって下さい。排泄のために造られたとか、わたしどものこの小さな器は男女を区

別するためであって他の目的のためではないとか、あれこれおっしゃって下さって結構です。そうではないですって。経験からしてそんなことはないということはおかっています。神学者先生のお怒りを買わなければ言わせてもらいますけど、この代物は二つの目的、つまり排泄の用と生殖の快樂のために造られているのです。こんなことを申し上げたからといって神様のご機嫌をそこねたりしませんもの。そうでなければどうして夫は妻に対してその負債を支払うべきだ、とあの聖なる典みことばに書き留められたのでしょうか。もし例の靈験あらたかな道具を使わなければ、いったい何で支払いをすればいいのですか。結局、それは排泄のためと同時に生殖のためにも人間に授けられたということです。(134)

そうかといって、先程お話ししましたような器を持つひとが皆わざわざ出向いて行って、生めよふえよにそれを使わなくてはならないと言っているわけではありません。要は、貞操など大げさに考えなくてもよいということなのです。キリスト様は童貞でいらっしやいましたし、れっきとした人間の体をなさっておられました。また天地開闢来このかた、たくさんのお聖人様もそうでした。そしてみなさん完全無欠の貞操を守ってその生涯を過されました。でも、わたしは処女なんか少しもうらやましくありません。そういう人達は上等の小麦粉でできたパン、わたしたち女房は大麦のパンということでもよいではありませんか。だって、マルコ様がおっしゃっておられるように、大麦のパンで主なるイエズス様は多くの人々を蘇らせなさったのですからね。わたしはこのまま、神様がお召しになられたままに暮してゆきたいと思っております。値打があるわけでもないのですから、わたしはそんなにもったいぶったりしません。妻として、自分の道具を造り主が授けて下さっただけ気前よく使いたいと思います。けちけちするようではもうおしまい。夫が進んでわたしのもとへやって来て負債を払う気になれば、朝晩いつでもあげることになっています。わたしは夫を受け入れてやるつもりですし、思いとどまる気もございません。わたしが妻の間は、

夫はわたしの債務者、わたしの奴隷。その上、肉の試練を味わうはめになるのです。わたしが生きている間、夫の体、頭のてっぺんから爪先まで全部に支配権を持っているのはこのわたしであって、だんじて夫ではないのです。ちょうどこうおっしゃって、使徒様も夫たる者にわたしたちをたっぷりかわいがるように命じておられます。わたしは、意義深いこのお教をすっかり気に入っているのです。」 (162)

ここで免償説教家がいきなり立ち上った。そしてすぐ、「これは、おかみ」と彼は言った。「神様と聖ヨハネ様にかけて、こういうことにかけては、お前さまはたいした説教家だね。やれやれ、すんでのところで権妻(ごんさい)をもらうところだった。なんでわたしの体でそんな高価な犠牲を払わなくてはならないんだ。今年も金輪際権妻(ごんさい)などもらわない方がよいというもの。」 (168)

「お待ちなさい」とパースのかみさんは言った。「話はまだこれから。そうよ、話が終って、別の樽をもう一樽あけなくてはならない頃には、お前さんの強がりも怪しいものさ。その樽はビール程お前さんの口にあう筈もなし。人生でずっと経験してきた結婚の試練、実はこのわたし自身がその試練の鞭ともなってきたのです。その試練にまつわる思い出話を語り終えた時、その時にはわたしがあけた樽からお前さんが飲むかどうかどうぞご随意になさいまし。そんなに近寄ってくるまえに、用心なさい。だって、この件で実例をご披露しようと思えば十以上もあげてみせますからね。

『他人の例をみて自分を戒めようとしないうちは、自分自身が他人への戒めとなるはめになる。』たしか、同じようなことをトレミー様も書いていたはず。トレミー様の『天文学大全』でも読んで、肝に銘じておくがいいよ。」 (183)

「おかみ、お願いだ、おかみさえよかったら」と件の免償説教家は言った。「さっき始めたように、その調子で話を先へ進めて欲しいものだ。誰にも遠慮はいらない。ざっくばらんなところをお願いしたい。わたしたち

若い者におかみの手のうちをひとつ披露願おう。」 (187)

「ええ、ええ、よろこんで。お望みならね」とパースのかみさんは言った。「でも、ご一行の皆さんにお断りしておきますけど、わたしが気のむくままにしゃべっても、言ったことにいちいち目くじらをたてないでください。わたしの気持としては、ただおもしろおかしければそれでいいのですから。」 (192)

さあ、皆さん、これから話をすすめましょう。この先ずっとぶどう酒やビールをたしなめますように、胸のうちを腹藏なく申し上げます。結婚した夫のうち三人はあたりで、二人ははずれでございました。この三人というのは立派で金持で、その上、年寄でした。彼らときたら、わたしに負うべき結婚の債務をやっとの事で果たしておりました。どういう意味かももちろんおわかりですね。ほんとうに今思い出しても吹き出してしまいます。夜ごと、それはもうかわいそうなくらい骨を折らせました。実のところ、そんなことには一向おかまいなしかったです。三人共わたしに土地も財産も譲ってくれていたのです。ですからなにをいまさらやっきになって夫の気持をかちとろうとしたり、敬意を払う必要などあったでしょう。天にまします神様にかけて、夫はこのわたしにすっかり首ったけでしたから、その気持をとくにありがたいとも思いませんでした。聡明な方は殿方の気持をなんとか自分のものにしようと、たえず気をつかうでしょう。そうですとも、まだ自分のものにしていない間はね。でも、わたしは夫をすっかり掌中に収めていましたし、それに土地もみなもらっていましたから、なにをわざわざ夫の機嫌をとろうと気をもむ必要などあったでしょう。ましてや自分の利益にも楽しみにもならないとしたら。わたしは夫にそれはそれは精出させてやりました。おかげで、くる夜もくる夜も『ああ、お助けを』と悲鳴をあげていました。わたしの夫は、エセックス州のダンモウで与えられるというあのベーコンには縁がなかったと思います。わたしなりのやり方で夫を上手にてなづけていましたので、みな上機嫌で嬉々として

わたしのために市から贅沢なものを買ってきてくれたものです。彼らは、わたしが優しい言葉のひとつでもかけてやった時など、もう大はしゃぎでした。というのも、実は、わたしは口汚く罵っていたものですからね。

(223)

わたしがどのようにうまく立ち回ったか、まあお聞き下さいまし。聡明なご婦人方なら納得されるでしょう。夫にむかってこんなふうにしゅべったり、罪もないのに夫の非を咎立てやるとよいのです。だいたい臆面もなくこうだと言ひ張ってみたり、嘘をついたりする術(づ)を女の半分程も心得ている殿方なんていやしませんもの。聡明なご婦人方をもち出してきてこんなことを申し上げるのは、皆様が損な立場にたれた時のためによかれと思つてのことです。聡明なご婦人方なら、自分のためとなれば例の鳥は氣違いだと夫を言いくるめ、女中と口裏を合わせて証人に立てたりするでしょう。ところで、このわたしならどのように言ったか、どうぞお聞き下さいまし。

(234)

『この老いばれ爺さん、お前さんが服を誂えてくれるといたつて、こんな有様じゃないの。隣の奥さんはなんであんなにおめかししてるの。着飾っては行く先々でちやほやされているのよ。それにひきかえ、このわたしときたらじつと家にすっこんで、身につける服にしたってましなものなんてひとつもありゃしない。それにお前さん、隣の家でいったい何をしているのさ。その奥さん、そんなにきれいだっていうの。お前さん、そこまで女好きだったのかい。うちの女中とも何をこそそそ囁いているのさ。ほんとうに口惜しいつたら、この好色爺さん、悪さはおよしよ。そのくせ、身内同然の氣心も知れた男ひとやお友達がいてわたしがその人の家へ遊びに出かけようものなら、別に悪いこともしてないのに、お前さんときたら悪魔のようなものすごい剣幕で叱るくせに、お前さんは溺れかけた鼠のようにぐでんぐでんに酔っぱらって帰ってきては、長椅子に腰をおろしてくどくどと説教をはじめるじゃないか。まったく罰あたりもいいとこよ。おまけ

に言種がふるってるじゃないの。貧乏女を嫁にもらうと物入りでひどい目にあう。かといって、家柄のよい金持女だと気位ばかり高くて怒りっぽいのに閉口する、とこうだからね。美人ときたらきたで、鼻の下の長い連中がものにしようとしやがる、とくるでしょう。お前さんって人はいけない人だよ。よってたかって四方八方から攻めたてられたひにゃ、片時だって貞操なんか守れやしない、などとよくもいえたものね。(256)

また、お金めあてにわたしたち女を望む者もいれば、女の体めあての者もあるし、美貌に引かれる者もある。歌や踊りがうまいといって女を望む者もいれば、育ちがよくて愛敬がある女を望む者もあるし、ほっそりとした手や腕がいいという者もある、などとおっしゃるわね。こんな根も葉もない話をでっちあげるなんて、お前さんにかかっちゃみんなが皆地獄おちだよ。長い間四方八方攻めたてられては城壁は守りきれやしない、などとよくもまあ。(264)

お前さんの言うには、醜い女だと男と見れば貪るように求める、引取り手がみつかるまでは犬ころのようにまつわりつくのだから、だって。湖の灰色の鶯鳥でもちゃんとつがいの相手を求めるからな、とも言ってたわね。それに、誰もすすんで望みもしないものを自分のものにしようなんて土台無理な話だ、と言うんでしょ。床につこうとするとこんな風に言うんだからね。ひとでなしだよ、お前さんは。賢い男は結婚なんぞするものじゃない、天国を望んでいる男だってそうだって。荒れ狂う雷と激しい稲妻で、お前さんのしわくちの首が木葉微塵に砕けてしまえばいいのに。

(277)

それから、なんだってね。雨漏り、煙、がみがみ女房、夫を家に寄せつけず、だって。ふん、冗談じゃない。こんな爺さんがいくらぶつくさ言たってへっちゃらだからね。(281)

わたしたち女ってのは身を固めるまでは欠点を隠しておくくせに、後になって正体をあらわす、なんていうのがお前さんの科白(が)だよ。そんな

のどうせ碌でなしの口にするおきまりの言種に決っているさ。(284)

また、なにかい。牛、ろば、馬、犬は買う前に色々試してみることができ。鹽に水差、スプーンに腰掛、日用品すべからく然り。いわんや、鉢に衣に身の回りのものをや。ところが女子衆はお興入れの日までは試食もかなわぬ、とお言いだね。憎ったらしいったらありゃしない、この耄碌爺さん。欠点を隠さなくなった頃には、もう後の祭とは、よくもおっしゃいますよ。(292)

それからこうも言ったね。美しさをほめそやし、顔をじっとみつめて、ところ嫌わず「いしいおまえ」などと呼んでやったりしなければわたしの機嫌が悪い、とね。おまけに、誕生日にはお祝いをして、心浮き浮き愉快にしてやったり、やれ乳母殿だの、お女中殿だの、父方の一族郎党だといつて連中を引き立ててやらなきゃあ、おまえはふてくされるんだからなあ、とはよく言えたものね。そんなの年寄りの大法螺よ。(302)

おまけに、うちの徒弟のジャンキンのことにしたって、彼の金髪が一点の瑕もない黄金のようにきらきら輝くちぢれ髪だからといって、そしてどこへ行くにもお供についてくるといっては、根も葉もない疑いをかけてくれたわね。たとえ明日が日にもお前さんがくたばったところで、ジャンキンとどうこうなろうなんて気はないよ。(307)

いったいどういうつもりなの。なんだって長櫃の鍵をわたしから隠したりするのさ。口惜しいっらないよ。それはお前さんのものであると同時に、れっきとしてわたしのでもあるんだよ。それとも、お前さんはこの家の奥方さまを馬鹿にしようっていうの。いいかい、大ヤコボ聖人様というお偉い方の名にかけて、たとえお前さんがかんかんに怒っても、わたしのこの体と身代の両方を思いどおりにはさせないよ。お前さんがいくら目を光らせたって、どちらかひとつは手離さなきゃならないのよ。わたしのことをあれこれ詮索したり、こそこそ様子を窺ったりして、いったい何になるんだい。きっと、このわたしを長櫃に鍵をかけて仕舞い込んでおきたい

んだらう。こう言ってくれたっていいじゃないの。「おまえ、好きな所へ出かけて気晴してもしておいでよ。世間の噂なんか信じやしないよ。おまえが貞淑な妻だってことはわかっているからね。アリスや」とね。わたしたち女というのは、どこへ出かけるかいちいち気にしたり、目を光らせたりするような男は好かないんだよ。拘束されずに気儘でいたいのに。

(322)

「天文学大全」の中で「人すべからく、その叡智は、誰が天下を統べようといちいち気にせぬこと」という格言をおっしゃった賢明な天文学者トレミー先生という方は、全ての人たちからこぞって称えられていいんだよ。この格言でお前さんもおわかりだろう。もう十分満たされているのに、他の者がどんなに嬉々として振舞っていたっていいじゃない。どうしていちいち気にしたりするのさ。それに爺さんえ、言わせてもらいますけどね、お前さん、夜にはたっぷり楽しいことをさせてもらっているじゃないか。自分の行燈から蠟燭の灯をつけさせてやらないなんて、とんだけちん坊だよ。それで灯が減るわけでもあるまいしさ。もうたっぷり楽しんでいるんだから、ぶつぶつ言うことないでしょ。

(336)

わたしたち女が服や値のはる飾りできれいに拵えると、貞操が危いだって。しかも、いまましいことに、念には念をいれなきゃ気がすまず、使徒様の名を借りてこんな言葉をのたもうじゃないか。「女たちよ、汝ら、貞節と慎み深さの糸で織られし衣服を身にまとうべし。そして、髪を編んだり、真珠や黄金のような華美な宝石、贅沢な衣服で身を飾りたててはならない」とね。お前さんが引合に出す聖句や典礼執行規定なんかで、蚊ほどだってじたばたするものじゃないわよ。

(347)

お前さんはこうも言ってたね。わたしが猫みたいだって。猫ってのは誰かが毛を焦すとじっとしているものだが、毛並が艶々してきれいになると、半日だって家にじっとしてやしない。夜の明ける前に外をほっつき歩き毛並をみせびらかし、さかりがついてギャーギャーうるさいこった、と

こうだからね。つまり、わたしがめかし込でもすると、表に駆け出してこんな粗末な服をみせびらかすとでもいうの。いけ好かない人だよ。

(356)

馬鹿だねえ。こそこそ窺ってなんになるのさ。お前さんがあの百眼アルゴスに、ちょうど適役だということでわたしの警護の役を頼みこんだとしても、こちらが望まなきゃこのわたしを見張るなんてできっこないさ。本当よ。あのアルゴスを出し抜くくらいわたしには朝飯前だよ。お生憎さま。

(361)

またこんなことも言ったわね。この世の禍となるものには三つある。四つ目の禍はどんな人間にも耐えられないってね。ほんとに仕様のない人だね。ごねてしまうがいいのさ。悪妻は禍の一つなり、こうお説教をしたわよね。罪もない女房をその一つに数え上げなきゃあ、他にまじなたとえようはないのかい。

(370)

それから、お前さんは女の愛を地獄や水気一滴も残らないやせた土地にたとえたわね。火薬にもたとえて、燃えれば燃えるほど火のつくものはなにもかも焼き尽さなきゃ気がすまない情欲の炎(ヒカリ)だと言ったわね。虫が木を枯らすように、女房は夫を破滅させるですって。これしきのこと、女房の尻に敷かれているものなら、先刻承知のすけだというんでしょう。』

(378)

皆さん、もうおわかりのように、こんな具合に、お前さんは酔っぱらった拳句かくかくしかじか言ったわよ、などと年老いた夫たちをさんざんいたぶってやりました。ほんとうは、みんな口から出まかせだったのです。ジャンケンや姪に証人にでもなってもらわなければね。ああ神様、まったくかわいそうなことに、わたしは夫たちをなんの罪もないのに痛めつけて悲鳴をあげさせてやったのです。だって、わたしは馬みたいに噛みついたり嘶いてみたりして不平をならす手段を心得ていたのですからね。わたしの方がいけないんですけど、こうでもしなければ何度危い目にあったいた

かも知れません。最初に粉挽小屋に来たものがまさきに粉を挽くのです。まず先手を打ってわたしの方から小言を言ったからこそ、わたしたち夫婦の諍いにかたがついたのです。夫たちは全く身に覚えのない疑いを晴らそうと進んで申し開きをしたものです。病気でほとんど起き上ることもできないのに他(他)し女のことで、わざと責めさいなんでやりました。(394)

それが結構夫の心をくすぐって喜ばせていたようです。夫たちはこのわたしが自分にぞっこんまいてると思ひ込んだらしいのです。わたしが、夜、外を出歩くのは夫がいっしょにしけ込んだ情婦(おんな)を見張るため、などと言ひ張ったのです。こんなもってもらしい言訳をしては、随分いい思いをしたものです。こういった抜目のなさは全てわたしたち女の生れつきの才能なのです。騙したり、涙をみせたり、糸を紡いだりすることは生涯女の天分として神様が授けて下さいました。そういうわけで、わたしにはひとつ自慢できることがあるのです。悪知恵や、腕力や、あるいはいつまでもぶつくさ言ったり、愚痴をこぼしたりなど、あれやこれやの手段を使ったものですから、結局は万事につけわたしの方が一枚上手(うまい)でした。とくに寝床の中では夫たちは惨めなものでした。わたしはがみがみがなりたてるばかり。あの人たちにはなにひとつ満足させてやる気などありませんでした。夫の腕がわたしの脇腹に触れるのを感じただけで、もう寝床の中にじっとしてはいません。やがて夫が自分の身代金の支払を済ませてくれた後にやっと、夫の馬鹿げた求めにも応じてやりました。ですから、皆さんにこう申し上げたいのです。自分の得になるなら、どなたでもものにしておきなさいよ。すべて売物なのですからね。但し、素手では鷹を誘き寄せすることはできませんよ。自分の得になることならわたしは夫の好き心にも我慢しましたし、わたしの方でもその気になっているふりをしました。でも、古薰豚爺さんなんか満足してやいませんでした。それで、しょっちゅうわたしは叱りとばしてやりました。たとえ教皇様が夫のそばに座っておられたところで、わたしはその席でも容赦しやしません。正直言って、

言われただけ一言一句みんな言い返したものでした。全知全能の神様もお助けあれ。たった今遺言状を書かなくてはならないとしても、夫に一言だって言葉の借りはありません。わたし一流の才覚で策をめぐらして、降参した方が身のためだと夫に思わせてやりました。さもなければ、わたしたち夫婦は平穩無事にはすまなかったでしょう。夫が獅子のように猛り狂ったところで、結局、自分の思いどおりにはなりませんでした。 (430)